

★サイクルツーリズムによる地域活性化をめざして
自転車観光推進地域交流フォーラム

2014年3月1日（土） 旧大津公会堂3階ホール

●ゲスト

宇都宮 一成 氏（NPO 法人シクロツーリズムしまなみ）

NPO 法人シクロツーリズムしまなみポタリングガイド歴 5 年。10 年の歳月をかけたタンDEM自転車による夫婦世界一周旅行で培った感性と観察眼で、誰も気付かなかったしまなみ海道の魅力を発掘。多くの人にしまなみ海道自転車旅を楽しんでもらおうと奮闘中。しまなみ自転車旅のことなら、どんなことでもおまかせ。

岩崎 知巳 氏（一般財団法人淡路島くにうみ協会）

一般財団法人淡路島くにうみ協会事務局次長兼総務企画課長

1985 年に兵庫県職員となり、2009 年から兵庫県淡路県民局で観光行政を担当、淡路島ロングライド、サイクリングマップ、自転車用道路標識等に関わる。

2012 年から一般財団法人淡路島くにうみ協会に出向。

杉野 耕造 氏（サイクリングツアーズジャパン 代表）

自転車旅専門の旅行会社「サイクリングツアーズジャパン」（奈良市）代表

30 年間のメーカー経験から、日本において自転車のソフト面の貧弱さを痛感し、自転車旅専門の旅行会社を設立し、奮闘中。

近藤 紀章（NPO 法人五環生活 代表理事）

滋賀県立大学大学院環境科学研究科博士後期課程単位取得退学後、滋賀県立大学地域づくり教育研究センター研究員を経て、NPO 法人五環生活代表理事・聖泉大学講師。専門は環境社会システム。現在は彦根市をはじめとする滋賀県内で、自転車を中心としたまちづくりにかかわっている。

●開会挨拶 びわ湖のサイクルツーリズムとは？

近藤隆二郎（輪の国びわ湖推進協議会会長／滋賀県立大学環境科学科教授）

サイクルツーリズムというものと地域活性化がいろいろなところで注目を浴びてきて、しまなみ海道もくにうみ協会も具体的に始まっている。私たちもびわ湖でビワイチを中心にやっていますが、まだまだ学びたい事があり、今回のシンポジウムを企画させていただきました。

今日は東京や、いろいろな遠い所から来ていただきまして、ありがとうございます。天気も温かくなってきて、いよいよビワイチのシーズンも3月に始まりますので、機会がありましたらぜひびわ湖一周もしていただけたらと思います。

私から「輪の国びわ湖推進協議会」を簡単に紹介したいと思います。

もうかれこれ5～6年前になりますが、私たちはもともと、環境の面から自転車利用促進をやろうとしていたんですね。クルマに乗る人になるべく自転車に乗ってほしい、という運動をしていたんですが、なかなかクルマに乗る人に届かない。「なんで自転車に乗らなきゃいけないのだ？」。その時に気付いたのは、「ビワイチ」という言葉だったんですね。もちろんびわ湖一周サイクリングがあるというのは知っていたんですけど、実はその言葉はそんなに知らなかったんです。自転車の世界ではとてもとても有名で、改めて注目をすると、土日祝日を中心に皆さんバンバン走られている。ところが当時はインターネットのホームページを探してもびわ湖一周の公式サイトは無いんですね。自転車乗りはみんな知っているびわ湖一周だけど、一般の人は知らない。滋賀県の中高生はチャレンジとしてやってみよう、と突如思いついてママチャリで一周する、そういうものだったんですね。滋賀県の観光当局やビジターズビューローは何らその情報を提供していなかった、という事があり、びわ湖一周のことをやっている私たちと県の観光局とが、どうやって一緒にやろうか、なかなか合わなかったんですね。当時言われたのは「自転車に乗って来る人がどれくらいお金を落としていくのか」と、冷たいことを言われました。全然お金を落とさないじゃないか。確かにトレーニングで来る人は自分で食料を持ってきて、パアッと一周して帰っちゃうんですね。どれだけお金を落とすか、なかなか見えないです。さらに一つ言われたのは「何人来ているの？」、統計が無いんです。これはとても問題で、私たちはようやくカウントを、これは認定証やレンタサイクルやいろいろな統計を兼ね合わせて、どれくらい来ているのか把握しようとしています。

ただ最近、風向きが変わってきました。今日来ていただいているしまなみ海道や全国の自転車観光の盛り上がりがあるんですが、前はトレーニングのためにやって来た人が野宿しながら、あるいは日帰り、というスタイルから、高齢の方がカーボンフレームの自転車を買って、憧れのびわ湖一周をしてみようと言う人が来るんですね。

ちょっと余談ですが、何十万円の自転車を買ったが、実はパンク修理できない、メンテナンスが付いてこない、そういう人の入口としてとても良いと思うんですね。そういう人は途中で泊まられます。今、滋賀県の旅館業の方から「どうしたら良いのか？」という疑問が来ているんです。自転車で泊まりたいという人は、昔は民宿のような、サイクルステーションのような所に泊まっていたんですが、今はシティホテルや、あるいは琵琶湖ホテルみたいなホテルに来る。さらに何十万円の自転車があるんですね。宿の人はどうしたら良いのか判らない。今まで自転車は、例えば大津プリンスは屋根の無い駐輪場だったんですね。旅館の人たちの自転車に対するケアが届かなくて「どうしたら良いのか？」という声現場から上がってきました。

私たちがびわ湖一周のサイトを立ち上げて、よく来たのが道の駅からの苦情です。どういう事かと言いますと、クルマに自転車を積んで道の駅に来て、そこでクルマを置いて一泊する。そうすると道の駅の駐車場が占有されちゃうんですね。それを誰に言って良いのか判らないので私たちに、という事です。「より良い形でやっていこう」というのが現場サイドから上がってきている。今ビワイチにどんどん来ているんだけど、自転車の人たちと合わせてより良いサイクルツーリズムをここで展開していきたいと思っています。そういう意味で、私たちがびわ湖でやっていますが、まだまだもっと学びたい点もあります。レンタサイクルをしていますけれど、200kmの中でパンクしたら修理するサービスをどう作るか。コンビニはありますが、もっと地元の店に行ってもらうにはどうすれば良いのか。びわ湖は湖岸道路がありますので走れる人は日帰りで走れてしまいます。一泊二日あるいは二泊三日でゆっくり風景を見ながら走る家族連れをどうやってマネジメントしていくか。そろそろ、いろいろなサービスをやっていかなければいけないと思っています。

今日は宇都宮さんにしまなみ海道から来ていただきましたし、ディスカッションの方では岩崎さん、杉野さん、地元から近藤さんに来ていただいています。日

本の中でも割と進んでいる地域の人たちのなかで、サイクルツーリズムというのが今、どういう課題とどういう状態にあるのか、皆さんと共有させていただく。台湾の人をどう自転車に引っ張るか、京都に来ている外国の方をどう滋賀県に引っ張るか、という事もありますので、サイクルツーリズムの新たな次のステップにつながるような知見が得られたらと思います。

最後までよろしくお願いします。

●講演：しまなみ海道の自転車観光への取り組み

宇都宮一成（NPO 法人シクロツーリズムしまなみ）

NPO 法人シクロツーリズムしまなみの宇都宮です。

自転車の事は比較的詳しい方がいらっしゃっていると思います。「シクロ」というのは元々はフランス語源ですが、今はほとんど英語化しています。自転車旅行を通じて今治の島々の地域が元気になっていく、といった取り組みを私たちはしています。

●世界のサイクリング名所としまなみ海道

私は、1997年から2007年にかけての10年間、二人乗り用自転車、タンデム自転車で妻と一緒に世界各国を旅行していました。88カ国を10年半かけて廻ってきました。私が走ってきた世界の素敵なサイクリングコースを紹介しようと思います。

（以下、画像）

<カナダのアイスフィールドパークウェイ>

<チリのカミノアウストラル>

世界で一番美しい林道が500kmくらい続き、ヨーロッパからのサイクリストで溢れかえっています。

<パタゴニア地方>

無味乾燥地帯、風が強い未舗装地帯が 800km 続きます。何も無いこんな場所でも自転車の人たちは憧れるんです。不思議ですね。モノがあれば良いというんじゃないんです。走りたい人が世界中から集まってくる。

<パキスタンのカラコルムハイウェイ>

断崖絶壁の山々に囲まれた道が 900km も続いている。8000m級の山々が見える、本当にすごい山岳ルートです。

<チベット高原からヒマラヤ山脈を越え、ネパールへ抜ける国際道路>

自転車で世界一周をしたいと思っている人なら必ず憧れる場所です。空気が薄い、富士山より高い所から標高差 4,000mのダウンヒルが続くんです。未舗装ですから 3 日ほどかけて下っていくんです。ここも自転車乗りがたくさん走りに来ています。

<アンデス山脈>

<ドイツのロマンティック街道>

ドイツは自転車が走りやすい国なんです。それは「ロマンティック街道」「ブレーメン街道」「古城街道」「エリカ街道」といったテーマに沿ったサイクリングコース、4 日～1 週間くらいかけて走れるようなサイクリングコースが国中に張り巡らされているんですね。走行環境がすごく整っています。だからヨーロッパ人はちょっと休みができるとドイツへ走りに行く。こういったものがドイツの魅力、ヨーロッパの魅力だなと感じました。

世界にはこういった素敵なサイクリングコースがたくさんあるんですけど、そういったところに仲間入りしたいと頑張っているのがしまなみ海道だと思っています。行かれた方はよく判ると思いますが、まだ行かれていない方々のために、しまなみ海道の 3 つの魅力をご紹介します。

やはり島の連なりがきれいです。道を走っていると、カーブを曲がる度に風景が変わっていくんです。大自然に囲まれたカーブを曲がると造船所が見えたり、古い街並みが残っていたり、集落に迷い込むと楽しい出来事もあります。風景が

めまぐるしく移り変わっていく、island hopping が楽しめる。これが一つ目の魅力です。

それから、橋で海を渡っていく。橋の上を走る時は本当に鳥になったような気分です。そして海を渡って四国から本州へ、本州から四国へいける、これがすごく魅力的だなと思っています。

3つ目は島に入ると、島の生活感が味わえます。道に迷って地図を開いていると、地元の人が「どっから来たん？」と気さくに声をかけてくれる。島の人たちはゆったりしていて、割と声をかけてくれるんですね。今だとみかんの季節です。「兄ちゃん、ちょっと来いや」とか言われて、行くと「これをもって行け」と袋一杯のみかんを渡される。自転車やけん重いんやけどな〜、と思いながら。自転車って線の旅なんですね。単に目的地から目的地へ移動するだけじゃなく、その過程も楽しめる、そういった出会いやコミュニケーションが楽しめるのがしまなみ海道の魅力かと思います。

●自転車でどがいするのぞ

私たちは活動を始めて6年目なんですけれど、最近は本当にやりやすくなったんです。6年前、私たちが新しい事業展開をしようと市役所に行くと、「あんたら自転車の事をして、どがいするのぞ（そんなことをして何になるんだ）」と、本当に言われていたんです。「自転車にはいろいろな需要がある」と説明しても、なかなか通じない、まるで宇宙人のように思われていたんです。ところが最近では自転車といえばオールOK、というくらい方針が変わってきているんですね。それというのも、自転車ブームがあって、自転車の人たちが増えてきて、なおかつ中村愛媛県知事が、すごく自転車の取り組みに力を入れています。自ら自転車に乗って、サイクリング大会に出場します。知事が各市町村長に「一緒に参加しよう」と声を掛けるんです。そうすると市長さんも乗らざるを得ない。市長が乗ると副市長も乗る、各部署の部長も自転車を買う、議長も買う。そんなわけで自転車のムーブメントが起こっている、というのが愛媛県の現状です。

愛媛県は今「県まるごと自転車道」という構想を打ち出しています。愛媛県内でサイクリングロードを整備して、しまなみ海道まで来ているお客さんを県内に、そして四国へ流していこう、という取り組みを行っています。お隣の広島県

と、ナショナルサイクリングロードの制度の設定を国に提案し、しまなみ海道を第一号に認定してほしい、という動きを起こしています。

皆さんもよくご存知のように、自転車は健康にも良いし、環境にもやさしいし、そして観光にもたいへん効果がある、交通にもやさしい、こういう魅力のある自転車を使って、しまなみ海道から自転車の魅力や文化を発信していきたいと考えています。

●しまなみ海道の取り組み

しまなみ海道で実際にどんな取り組みをしているのか、紹介していこうと思います。

<NPO 法人シクロツーリズムしまなみ紹介のビデオ上映>

自転車というものを通して観光振興の側面、地域振興の側面を両輪で進めながら私たちは活動しています。

もう少し具体的に、私たちの取り組みの話をしていきます。

自転車ツアー、今回はガイドツアーもテーマの一つになってるかと思うんですが、私たちはただ走るだけではなく、地域の人々と交流をして、地域の人々が提供してくれるプログラムを利用して、それを体験しながら地元の人とつながってほしい、時間を一緒に過ごしてほしい。交流を促進するツアー内容を展開しています。ジャコ天など地元の名物を食べ歩くプチグルメツアーも展開しています。これはすごい人気です。お隣の松山の人になると今治の事はよく知らないんですね。「こんなお店があったんですねえ」と、すごく喜んでくれます。ツアーが終わった後、（参加者が）誰かを連れて行ってくれるんですね。それはガイドツアーとしてうれしい事ですね。

お母さんたちが畑の中にカフェを作り、釜焼きピザ体験ツアーもしています。一緒に生地をこねて、野菜をトッピングをして、手作りのトマトソース、それをお昼ご飯にします。島のお母さんもすごく喜んでくれています。

それから、島の食材を生かしたお弁当「二輪弁当」を島のお母さんに頼んで作ってもらいました。ひじきご飯のおにぎり、自家製の梅おにぎり、それから地元で摂れた蛸を使った蛸飯おにぎり。これをツアーのランチに提供しています。岩

城島で農家レストランを開いているお母さんたちのグループの、レモンづくしの「レモン懐石」。これをお母さんたちの話を聞きながら食べる。話がなかなか止まらないんですよ。すごく楽しいんですよ。人と人がつながるツアーを展開する、これが私たちの事業の一つ、自転車ツアーの紹介でした。

あっ、そうそう、タンデム自転車。乗った事がない方も多いと思いますが、日本では一般公道を走れる県と走れない県があるんです。今走れるのはわずか7県しかないんですね。愛媛県では2010年から走れるようになりました。「愛媛夢提案制度」という非常に良い制度があり、これに応募して、愛媛県に提案しました。「しまなみ海道が注目されて、『自転車の聖地』と呼ばれているけれど、タンデム自転車が走れないのはおかしい、何とかありませんか。タンデム自転車は健常者でも、親子で走っても楽しいけれど、目の不自由な人でも乗ってスポーツを楽しむ事ができる、ユニバーサルな乗り物で良いんですよ」。県が採択してくれ、県警に交渉して、タンデム自転車が規制緩和になりました。このような活動が私たちの実績ですが、タンデム自転車がOKになったので、毎年3月、全国からタンデム自転車が好きな人に集まってもらって、一緒に走るイベントも展開しています。

<ランニングバイク>

この自転車はペダルとチェーンがありません。なぜ私たちは自転車の事をやっているのか。今、しまなみ海道まで年間約17万台の自転車が来ているとの統計が新聞発表されました。17万人も来ているのに今治の街中まで流れてきていないんですね。やはり今治の市内まで回遊させたい。なおかつ、その人たちを受け入れる自転車の街を造っていきたい、と今治市では動いています。

「自転車の街」とは、まず自転車の好きな人を増やしたい、と思ったんです。でも大人の意識を変えるのはすごく難しいじゃないですか。今ママチャリに乗っている大人に「ヘルメットをかぶれ！」と言ってもなかなか難しい。自分たちにできるのは、子供たちに自転車の楽しさを知ってもらう事で、大人になった時に自転車好きを増やしたい。そういう思いで、この子供たちの自転車を始めています。これがランニングバイクと言うのですが、これに乗って、造ったコースをグルグル廻り、障害物を乗り越えてもらいながら、小さい頃からヘルメットを

かぶる、キチンと順番を守るとか、そういったマナー啓発とつなげて自転車好きの子供を増やす事です。今、このランニングバイクに力を入れています。

それから、やはり大事なのは情報の提供ですね。しまなみ海道のサイクリングマップとガイドブックを発行しています。これだけ自転車の人が増えてきていたんですけど、実は今まで自転車専用マップが無かったんです。よく問い合わせがありました。「しまなみのどこが面白いですか？」「どこに行けばお店がありますか？」。こういった島の情報を伝えなくてはいけない、と思って作ったのがサイクリングマップです。各島ごとに作ってきました。これはすごい評判で、全国から問い合わせがあるんです。旅に行く前に取り寄せて計画を立てて、実際に持って行って、見ながら走っている人がすごく多いです。マップを作って、それがすごく重要というのが判りましたので、去年、私たちが6年間の活動で集めてきた地元の資源を集めたブックを作りました。これもすごく評判良いです。ブックを作る時に「単に情報だけではなく、島の事を知ってほしい、島の人とつながってほしい」と思いました。手に取っていただくと判るんですが、情報だけではなく読み物としても面白いものにしようと、コラムを一杯載せています。こういった本を発行して情報を提供しています。

サイクルトレインの運行もしています。自転車をそのまま車内に持ち込める列車を臨時列車という形で、去年で10本くらい、今年はちょっと増やして年間40本運行させていく予定です。愛媛県庁所在地の松山市と今治市の間を1時間ちょっとで結びます。主に愛媛県内の方の利用が多いんですけど、東京・大阪・九州から、この運行日に合わせて旅行計画を立て来られる方もおられます。

●サイクルオアシスがつなぐ海道

今、すごく注目を浴びているのがサイクルオアシス。この仕組みを話してほしい、というので、この間は青森まで呼ばれて行ったんです。どんなものかと言いますと、担い手は島の人たちです。自分の農家や家・商店の軒先をちょっと貸していただいて、私たちがベンチ・空気入れ・目印のタペストリーをお貸しします。代わりに、もし自転車の人が「水をください」と言ってきたら、ボトルに水を汲んであげてください。トイレを貸してあげてください。情報を聞かれたら教えてあげてください。そんな、一休みできるポイントを整備していきました。今、愛媛県で35カ所、広島県で34カ所、合わせて69カ所整備されているんです。

けれど、本当に自転車の人たちを wellcome と思っている島の人たちが、自分たち
でできる範囲で無理をせず関わっている仕組みです。他所から来た人と交流した
いと思っているんですね。元々島のお母さんが自前でベンチを置いて、自転車の
人がひと休みできる「休息所」を作っていたんです。それにヒントを得て、こう
いうのが島の中にいっぱいあると、今までコンビニやスーパーの前で休んでいた
人たちが、このタペストリーを見て、立ち寄ってくれる。そこで島の人と交流が
生まれる。そういったものを作っていきたいと提案しました。

このオアシスの良い所は、今までは愛媛県は愛媛県、広島県は広島県、行政区
が変わるとつながらなかったんですね。愛媛県は自転車をやる前は「グリーンツ
ーリズム」、農業体験のプログラムが盛んなんですけれど、しまなみ海道は、他
所から来た人には愛媛県も広島県もないのに、愛媛県側にはグリーンツーリズム
体験があるのに広島県にはない、一緒につながらないのか、県境を越える取り組
みをしようとしていたのになかなかそうもいかなかったんです。でもサイクルオ
アシスは自転車というキーワードをもって、同じマーク、同じ仕組みがすぐに広
島県側にも導入してもらえたんですよ。やはり目に見えて判りやすい形があるの
が理解しやすかったんだと思います。そこが自転車の背景にあった。しまなみ海
道には同じ仕組みのオアシスが愛媛県・広島県共に同じ形で展開されています。

一休みできるポイントができて、次に何をしようか、と考えました。自転車が
パンクしたらどうしよう？ 壊れたらどうしよう？ 心配なんです。実は島には
自転車屋さんがほとんど無いんです。壊れた時にレスキューシステムを作ろう。
自転車屋さんの代わりにクルマの修理工場をお願いをして、パンク修理・スポー
ツ自転車の修理の仕方を覚えてもらって、島内 20 数カ所にレスキューシステムが
できています。

次にサイクルスタンドです。スポーツ自転車はスタンドの無いものも多いの
で、2012 年に「しまなみ海道の風景に合って、独自性のある自転車を立てかける
スタンドを作っていこう」と全国に公募したら 229 作品が集まりまして、中から
10 作品を選び、プレゼンテーションをしてもらい優秀作品を決めるコンテストを
行いました。審査委員長に伊藤豊雄先生（建築家）に座っていただき、そのネー
ムバリューで多くの応募があったんです。選ばれた作品は、人の形や手で支えたり、
自転車に乗る時の足を上げるときのスタイルや、自転車を持ち上げるスタイル
など 6 つのスタイルでデザインしてもらい、それを製品化して島に一体ずつ置

いていっているところです。愛車と一緒に写真を撮ってほしい、これを巡りながら島を回遊してほしい、というサイクルスタンドを島と今治の陸地部に展開しようとしています。

●島の人々との交流

ここまでが私たちの取り組みだったんですけれど、私たちが6年前に活動を始める前に、その前に自転車に取り組むきっかけになった、住民のグループができていたんです。今でこそ自転車のブームでレンタサイクルの貸し出し数はものすごく増えていますけれども、9年前は開通をピークに下がっていたんです。「自転車をどうにかせないかんよね」と、平成17年に、「自転車モデルコースづくり事業」が愛媛県の事業にありました。この中で、愛媛県の3つの大きな島の中に、自分たちの目線で見つけた島の魅力を自転車で来ている人たちに発信していこう、それをコースとして提案していこう、という事業でした。島人たちに呼びかけて集まってもらって、島の人たちが自分たちが自ら自転車に乗って島の面白い所を発見していきました。それをコースに設定し、マップにしました。こういった事をしながら、同時にWEB調査やモニターツアーも行いました。そしてしまなみ海道に自転車で行きたいと思っている人が求めているものって何だろう？を調査しました。そんな中で出てきた中で一番高かったのは「マップがほしい」「トラブル対応」「案内板がほしい」が挙がってきました。頻度が高かったものは、実際に具体化しているのが今の私たちの事業になっています。

島の人たちが集まって座談会をやって、自分たちの目線で資源を発掘する事業を始めた時、「ここは何にも無いけんね、何もできんよ」、最初はそう言っていた島の人たちが、外部の講師を呼んで一緒に走り、コースを作る作業の過程の中で、自転車で来ている人はバスで観光に来ている人と視点がちょっと違う、と気付き始めるんです。モニター調査では「収穫の手を休めてちょっと話しかけてくれたのがうれしかった」「自家製のお味噌汁が食べた事のない味だった」。島の人たちが何気なくやっている日常が他所から来た人には新鮮で楽しい、他所から来た人にはありのままで良い、何も特別な事をする必要は無い、これが島の人たちが気付いた事で大きいんですね。私たちは思うんですが、この場にあるのはおもてなし、お接待ですね。お遍路の地域ですから、人を見ると何かしてあげたい、とみんな思っているんですよ。個人と個人のつながりであったり、私たちと

他所から来た人たちのつながりであったりするんですけど、私たちがやろうとしているのは先ほどご紹介したサイクルオアシスをはじめ、旅行者の受け入れの基盤整備ですね。それから島の人たちが望んでいるのは交流人口の拡大です。他所から来た人と島の人とが交流する事により、お互いに理解が進む。「地域を元気にしていく」ってどういう事なんだろうと思っていたんですけど、相互理解が元気につながると思います。これが今のしまなみの暮らしを守ることにつながる。これが上手く回っていく事によって地域活性化・まちづくりの本題が達成できるんじゃないかと思いつながりながら活動を展開し、私たちの NPO としての存在は、他所から来た人と地元の人をつなぐ、中間支援的存在なのかな、と思いつながりながら活動しています。島の中に面白いもの、楽しいもの、といった資源がありますよね。例えばそれがダンゴなら、自転車というのはそれを串のようにつないでいる、それが今の島の価値だ、島民と一緒に地域を盛り上げていきたい、と思いつながりながら活動を展開しています。

私たちの取り組みは地域振興・観光振興の両面で進めている、と今日は紹介したんですが、こういった話が皆さんの何かお役に立つ事があれば本当に幸いと思っています。

今日は本当にありがとうございました。

●パネルディスカッション

サイクルツーリズムによる地域活性化をめざして

パネリスト：宇都宮一成（NPO 法人シクロツーリズムしまなみ）

岩崎知巳（一般財団法人淡路島くにもみ協会事務局）

杉野耕造（サイクリングツアーズジャパン代表）

近藤紀章（NPO 法人五環生活代表理事）

コーディネーター：稲永明子（輪の国びわ湖推進協議会副会長／歴史街道推進協議会）

稲永：私は歴史文化を活用した地域づくりと日本文化の発信を官民一体・広域で取り組んでいる歴史街道推進協議会で働いています。その中の一つの大きな柱と

して「観光的手法を用いた文化発信」に取り組んでいるわけなんですけれど、そこで今まで旧来の、安かろう悪かろうのレンタサイクルから、今注目を浴びているスポーツ自転車を利用する事によって、旅行の幅が非常に広がっていくのではないかと考えておりました、本日皆さんのお話を伺うことを楽しみにしています。

それでは、お一人ずつ、自己紹介も兼ねて、それぞれ取り組んでおられる事を伺ってきたいと思います。

●増えるアワイチのチャレンジャー

岩崎：淡路島から参りました岩崎です。淡路島くにうみ協会で緑花事業と地域振興事業を担当しています。くにうみ協会という名称は、古事記の最初にイザナミとイザナギの二柱の神が日本の国を生むという神話がありますが、その「くにうみ」の場所が淡路島であるということにちなんでいます。

こういう場所にそのような財団の者が出てきているということで大体の察しはつくと思うのですが、現在、淡路島でサイクルツーリズムを具体的に取り組んでいる人はおりません。そこで、サイクルツーリズムに限定せず、今、淡路島でどのような自転車の取組みが行われているかについて幅広く説明させていただきたいと思います。

淡路島で自転車の取組が進み始めたのは、やはりロングライドが始まってからです。平成20年頃、複数の事業者から「ロングライドを開催したい」という申出がありました。21年度に第1回をとという話だったのですが、なかなか上手くいなくて、22年度に第1回のロングライドを開催することができました。25年は、第4回を開催し、1周150kmのコースを1,974人が走りました。そのうち完走は1,872人でした。

ロングライドを始めるにあたって、淡路島には自転車関係のものが何もない状態でしたので、少なくともマップを作らなければいけないじゃないか、ということで、サイクリングマップを作りました。現在3刷目ですが、20万部くらい印刷し、島内の観光施設・コンビニエンスストア・島外のサイクルショップなどに置いていただいております。

島内には 40 くらいコンビニエンスストアがあるのですが、空気入れとタイヤレバーを置いてもらっています。また、そのことが分かるようにステッカーを貼ってもらったり、サイクリングマップの配布もしてもらっています。

また、県の土木事務所が自転車の走行を意識した道路環境の整備をしています。

内容は、「下り坂注意」「見通し注意」「この先のぼり」「のぼりの中間点」というような自転車用の注意サインの整備を 47 ヲ所。

淡路島の周回道路 150km の 10km ごとに「80km 地点です」というような距離標の整備を合計 15 ヲ所。

「緑の道しるべ」という県道の休憩施設にサイクルラックと案内表示板を設置したサイクルオアシスの整備を 10 ヲ所でそれぞれ進めています。

また、レンタサイクル店が何店かあります。フラットバーロードを中心にスポーツサイクルをレンタルする店が 1 軒、ミニヴェロが中心の店が 1 軒、それから電動アシスト付き自転車を淡路島観光協会が島内 3 ヲ所で貸し出しています。

ロングライドが始まり、宿泊施設も自転車客を意識するようになってきました。宿泊プランは「サイクリングマップあげます」「スポーツドリンク 1 本付いています」という程度のものがほとんどですが、「エレベーターに自転車を入れて良いですよ」「自転車専用保管場所を造っています」という施設もでき始めています。

去年、試験的な取組ですが、スペインのプロチーム「エスカルテル」の選手を 2 人お招きして、一般のサイクリスト 50 人と一緒に島内 90km を走るイベントがありました。その前日には、洲本市内の小学校で交流会を実施し、選手に児童と一緒に給食を食べてもらいました。午後からは、洲本市内の自動車教習所で、選手に中学生を自転車の乗り方教室をやっていただきました。また、「安全教室」という名目で、地域の方と交流していただく機会ももちました。

最後に、来週から島内のレンタサイクル店が定期的にガイドツアーを実施する予定です。来週は「淡路島梅の花鑑賞ツアー」、翌週は「うず潮まつりを見に行こうツアー」を実施すると聞いています。また 4 月末には専門的な知識を知ってもらうワークショップを開催すると聞いております。以上です。

稲永：「ビワイチ」に対して私たちは「アワイチ」と呼んでいるんですけど、ロングライドを開催することで、アワイチをされる方は増えているんでしょうか？

岩崎：そうですね、自転車で来られる方は確実に増えています。

●自転車の良い所だけを感じるツアー開催

杉野：皆さん、こんにちは。

5年前まで30数年、自転車のパーツを作るメーカーにいました。ここ数年、サイクリングブームですけど、ママチャリ時代から自転車に関わってきました。メーカーとして作りっ放しというのが正直なところですよ。お店をやっておられる方もソフト面も充実してきたとは言えなかったと思うんですね。そういう事情を感じており、メーカーは卒業させていただいて、今までお世話になったユーザーさんにどういう恩返しをしていけばいいのか？サイクリングの楽しみ方を知ってもらいたい。最初はボランティアで始めたんですけども、やはり時間の問題・お金の問題・サービスとしてできる範囲の限界を感じてきます。そこで旅行会社。自転車専門の旅行会社は日本に無かったんですから、それを作ろう、とエエ格好を言いながら独りでやっているんですけどね（笑）。長い間のメーカー生活でヨーロッパ・アメリカでも部品を売りに走り回っていました。自転車産業の中に自転車ツーリズムをやる旅行会社はアメリカにもヨーロッパにも、カナダにも南米にもオーストラリアにもあります。そういったものが日本にもほしい、と感じていまして、それを自分で実践したわけです。

私のコンセプトは単純なんです。自転車の良い所だけをお客さんに感じてほしい、シンドいことはしなくていいですよ、楽しんでいただきたい。パンクしたら、直さなくて済むなら直さないほうが良い。そこで時間を取られるよりプロに任せた方が良いでしょう。私どもの旅行はある意味でのガイドツアーです。ご所望いただいた所からバスに乗っていただいて、自転車もそのままラックに積みまします。完全な養生をしますので、相当高い自転車でも安心して預けていただけます。それで目的地まで、私たちサイクリング協会のインストラクター資格を持った者がお連れする。いたれりつくせりのツアーと、「勝手に」というツアーもあ

るんです。このツアーはだいたい出発地点と最終地点、ビワイチ・アワイチのようにぐるっと廻って戻ってくる。しまなみ海道の場合でしたら、尾道で降ろして今治で宿泊、とびしまを走っていただいて、広島から呉でピックアップする。クルマではなかなか行かれない所へお連れする、そんな旅行を作っています。

もう一つ去年から始めたのは、地元の方と触れ合っほしい、人と人との触れ合いを旅として共有したい。「自転車ランデブー」というシリーズをやらせていただいています。これは各地域で頑張っている皆さんと一緒にコラボしないとできない。去年は長野県諏訪で頑張っておられるスワクルさんという団体と組んでやらせていただきました。私どもはそういう形で、地域で頑張っておられる方の所へお客様をお連れする立場です。ここにいらっしゃる他のお三方は受け手の側で頑張っらっしゃいますね。

同じ意味で、奈良県のサイクリング協会での取り組みに、私も理事という立場で少し関わらせていただきましたので、紹介させていただきたいです。京都へは観光客がたくさん来られるから、名所を自転車で廻ってもらう、アクセスを維持し、トータルの交通システムを見直そう、という立場だと思うんです。奈良の場合は残念ながら宿泊先が京都や大阪で、立ち寄り場所として来られる。一つ一つの観光スポットに非常に距離があり、なかなか動きにくいところがあります。そういう現状を奈良県では、「奈良県自転車利用促進方策検討委員会」が 2009～2010 年に立ち上げられました。徳島大学の山中先生を中心に有識者で、広域的に周遊観光をどうしていくのか、そして健康とスポーツ・環境とからめて、奈良において今後の自転車利用をどうしていけば良いのかを検討されました。それに基づいて 2010 年 12 月にまとめられたのが「奈良県自転車利用促進計画」です。ここでは自転車で巡る奈良エコツーリズムを前提にされています。ハード面では安全で快適で判りやすい自転車利用ネットワークを構築します、具体的に言えば、自転車に乗る人が見やすい看板、見やすい大きさ、どうすれば見やすい所に設置できるか？ という事まで考えて設置します。もう一つ、自転車利用のソフトの方は、利用しやすい環境はどうしたら良いか？ 観光客に乗ってもらえば良いのですが、奈良は京都より観光客の数が足りないゆえ、自転車乗りに奈良に来てもらい、奈良の良さを知ってもらい、「奈良は自転車が走りやすい場所や」というアピールをしてもらうためのハードとソフトを揃えていくという考え方で、「サイクリストにやさしい宿」を選定しています。今お話がありましたように、高い

自転車を自分の部屋に持ち込める、屋根のある場所で保管できる、あるいはバイクラックや空気入れがある、というようにお宿の方において整備していています。それと、乗り捨てができるレンタサイクルを秋にやっています。自転車には荷物が多いんですね。遠い所から自転車とキャスター付きスーツケースを持って来られたら、スーツケースを朝、宿を出る時に搬送サービスに渡して、その日の終着ポイントまで届ける、というサービスもやっています。他に、もちろんサイクリング大会の主催を県としてもやっているし、県の他の団体の支援という形でもやっています。

具体的にはサイクルマップ、京都府と奈良県が連携して、嵐山から明日香まで、総延長 90km くらいのコースが自転車道としてつながっています。そのマップです。「ならくるマップ」は県内 31 ルート 593km におよぶサイクリングのマップも揃えています。

それから「ならクルターミナル」として、橿原神宮前にサイクルステーションを設けました。無料駐輪場・無料の修理スペース・コインシャワーが備わる、そんなステーションを造りました。イベントとしては奈良サイクルツアー、若草山ヒルクライム、ツール・ド・まほろばツーリング大会、というようなものを行っています。私どもサイクリング協会としては、もう 10 回目のグランフォンド、上北山の台ヶ原ヒルクライムも 7 回目です。そういうものにも支援をしています。そんなところです。

稲永：私はまだ杉野さんのツアーには参加した事は無いんですが、いつも Facebook で下見に行かれるのを見ていますと、美味しいものをたくさん食べられて、これは行ってみたい（笑）。奈良県のマップは、県境の枠を越えてこういう形で作られたのは、行政としては画期的な取り組みで、こういうのが広がっていけば良いと思います。

●ビワイチの現状

稲永：では近藤紀章さん。五環生活の取り組みについて、自転車を中心としたまちづくりについて、お話をお願いします。

近藤：近藤です。専門が環境社会システムですが、滋賀でいろいろ取り組みをしていく中で、自分自身は人間・地域社会のつながりに着目して、特に民俗や文化をキーワードに掘り起こしてモデルを作り、それを社会や地域に再適応させていくような活動をしています。研究と実践、コンサルタントと研究者をやっている形です。テーマとしては観光や交通など、人の移動を通じた研究をしています。例えば中山道の歴史を使って、ガイドの話を組み合わせて、地域でおもてなしをするコンシェルジュを仕掛けたり、今、問題の空民家について、昔は家を直す時などに総出を行う「ゆい」という文化と現在の大工技術とを結びつけて、都会の人と交流をはかる修繕イベントなどをやってきました。皆さん自転車をやっておられる方は特に感じてらっしゃると思うのですが、今は時間間隔が早くなっているので、それを落とすような地域を作っていけたらな、ということをやっています。さらに多様な日本像を開いてきたい、とくに滋賀での神話・遺跡を生かしたまちづくりなども考えています。五環生活の取り組みもその一つです。五環生活に私も関わるようになって、自転車・暮らし・稼ぎ・ボランティアなどについて考えながら実践を重ねてきています。

五環生活は彦根にある団体です。話が長くなるので割愛させていただきます。詳しくは、「地域再生；滋賀の挑戦」（新評論）の中に「自転車が生きるまち」の章を近藤先生が書かれていますので、ご覧ください。自転車をベースして地域をつなげていこう、身体・つながり・暮らしを見直そう、ということをやっています。主要なプロジェクトとしては、ベロタクシーの運行、レンタサイクルの異運営、「輪の国びわ湖推進協議会」のビワイチプロジェクトへの協力などです。

今日はびわ湖の自転車観光についてお話しさせていただきます。

五環生活では「プラスサイクル」という考え方を一つのキーワードにしています。これは「自転車そのものをどうにかしよう」という考え方ではなく、「自転車でどうでしょうか」という、下手に出て自転車から考えていこうということでやっています。いろいろやっているのですが、私どもは湖東地域を中心にレンタサイクルを主にやっていますが、それとあわせて、環境整備の計画づくりなども県や市町の皆さんと取り組んでいます。

そのなかで、びわ湖一周レンタサイクルと輪の国事業について話をさせていただきます。びわ湖一周認定証については、「輪の国びわ湖」の事業に協力させていただいているのですが、13カ所にチェックポイントがあり、4カ所以上廻って

クイズに答えれば自動的に記録され、認定証を発行します。今、約 2,800 枚発行して、3,000 枚までいきそうです。何が言いたいかといいますと、このデータは、びわ湖に来ている人がどれだけいるのか正確に把握できていないなかで、一つの指標になると考えています。びわ湖一周が多いのは4～6、8～10 月で、冬季は少ないと判りました。認定証を申請された方のデータを読み解くと、3/4 が男性で、年齢は 20 代が非常に多く、10 代もそこそこ多い。女性は 20 代が多いですが、男性が中心と読み解けます。どこから来ているのかは、滋賀県が多い、と認定証から判った。大阪・京都・愛知・岐阜の順になっています。

われわれ五環生活は独自にスポーツバイクのレンタサイクル事業をさせていただいています。規模としてクロスバイクが 24 台、ロードが 7 台、子供用 3 台、全部で 30～40 台です。個人のお客さんが多いのですが、団体で使われる場合もあります。過去には企業の団体研修やイベントでの利用や、今年の冬には J2 の「ファジアーノ岡山」の春季キャンプなどでも使われています。

昨年度のレンタサイクルの利用状況ですが、アンケートに回答していただいたのが約 1,000 人で、内訳は男性 65%、女性 35%でした。来られたのは大阪・県内・京都・兵庫の順で、大阪・滋賀・京都で半分以上でした。意外と東京も多いのですが、このあたりの情報発信がわれわれも滋賀県も弱いと思います。県内では彦根が多いです。海外ではブラジル・ペルー・オーストラリア・香港。やはり 20 代が圧倒的に多く、中でも学生が 3 割以上を占めているのが判っています。月別の利用者を見ると、4 月に一旦落ち込みました。去年は天気が悪かったのもありますけれど、そういう傾向にあります。8～9 月はとても多い。さらに「ふだん自転車によく乗っている」方は多いのですが、半分以上はママチャリに乗っていらっしゃる。リカンベントに乗っている人が 2 人で、電動アシストはゼロでした。利用者の声では、1/3 は満足なのに、意外に多いのが「お尻の痛みは何とかならんのか」。「サドルカバーが必要だ」という声が出ています。後悔したのは「荷物が予想以上に多かった」「事前準備・下調べをすればよかった」など。次回は、手袋が必需品、というコメントが一番多い。泊まったお宿についてはほとんどが良いコメントが書かれています。中でも「対応が良かった」「ごはんが美味しかった」が多いです。これとは別に、ツアーをまとめて申し込まれた代表者にアンケートをしているのですが、ほとんどがビワイチは初めてで、その人がコーディネートしています。コースは北湖一周の人がほとんどで、ツアーの人数は

だいたい3人。情報をそこまで事前に調べていなんじゃないか、というのも判ってきています。トラブルは、多いのはライトの紛失、ヘルメットが壊れた、が多かった。時期では件数の多い7~8月が多いのですが、11月も意外と多いです。乗り捨て・回収もやっていることはやっているのですが、いろいろな状況があって、対応が難しく、夜遅くに行かなければいけない事もあるなど、この辺が悩みどころです。事前の準備の徹底で対応したいと考えています。

駆け足でしたが、びわ湖のレンタサイクルから見るサイクリストの状況でした。

宇都宮：しまなみ海道は東京からは遠いんです。1年に一回行けたら良い。でもびわ湖は関西圏にあり、中部地方があり、関東圏からしても決して遠くない。自転車は線の旅だから、日本のサラリーマンの休みからするとあまり理想的じゃないかもしれないけれど、旅の視点から言うと、東から流れてきて、びわ湖を一周して西へ行ける。西から来てもびわ湖一周して東へ行ける。日本の旅の中心部分ですよ。立地のよさを感じますね。日本を走るならばびわ湖を走って東へ西へ行く、という立地の良さを昨日と今日、走りながら感じましたね。

(※宇都宮さんは前日と当日、びわ湖一周のハイライト部分を走った)

それから、資源が豊富。良いのがありますね。歴史が深い、これが面白かったです。何百年の歴史が積み重なっている。(立ち寄った)西野水道は、こんなのをなぜ造ったの? 造られた歴史にワクワクしました。こんなものを眠らせておいてはもったいないですね。自転車でこんなものを一つ一つ廻りながら湖畔を走り、資源を巡り、集落の中に入れば面白い路地裏や小路がいっぱいあるじゃないですか。そういうのを組み合わせて、自分だったらこういうツアーをやりたい、と頭を膨らせながら走りました。たぶんみなさんご存知だと思いますが、おはぎの美味しいお店「駅長さん」のオバちゃんとの会話が楽しいんですよ。言ったら返してくれる。こういう人との出会いがこの地域にはあるんだな、と思いました。

基盤整備としては、サイクルコースの看板は立っているのですが、初めて来た人にはちょっと判りにくい、迷いやすいですね。この道で良いのか? ちょっと不安ですよ。立っているものと地面に描かれているもので案内してくれるとすごく判りやすい。始めてきた人は、自分のいる位置がよく判らないんです。やはりしまなみに行くと住民の意見を行政が反映して作ったんですけど、曲がり角

にきちんと木で作った看板があるんです。それには地図があり、現在地、次の主要な施設まであと何 km、なおかつ地面に引かれたラインがあるという 2 本立てで迷いやすい場所をフォローしているんです。こういう基盤が整っていくと、初めて来た人がレンタサイクルを借りて、行けるところまで行って、無理なく帰って来られる、という事が出来るんじゃないかと思いました。

お話に出ていましたレンタサイクル。極端な話、自分の自転車を持っている人は自分で走れるんです。リピーターも多い。これからはサイクリングをやった事のない人たちがびわ湖で自転車に乗ってみたい、面白そう、というように取り込んでいかないといけないでしょうね。そんな時にレンタサイクルという仕組みです。乗り捨てという制度が実に難しいんだと思います。しまなみも今でこそ尾道で借りて今治で返したり、今治で借りて島で乗り捨て、というのができるようになったんですけど、最初は全然できなくて、開通当時は便利さが無かったんですよ。なおかつ自転車の回収に行くのに、何が大変かと言えばクルマの高速料金。日本で一番高いと言われる高速代がクルマにかかる。びわ湖は要らない、良いですよ（笑）。利用者にしてみれば乗り捨ては絶対不可欠な条件の一つなんですよ。これがあるからレンタサイクルが年間 7 万台近く借りられているんです。市町村では難しいから広域で連携して、助成金も取りやすいし、レンタサイクルのクオリティを上げていける。ママチャリがあっても良いけれど、スポーツバイクも借りられる。便利さをアップすることで他所から来た人が「走ってみたい」「便利だって」ということになっていくんじゃないか、と感じました。

稲永：とてもうれしくなるお話でした。でも気になる点のご指摘もありました。近藤さん、いかがですか？

近藤：そうですね。びわ湖一周はすごく大きいので、表示のわかりにくさの改善は非常に難しいところがあると思います。当然、行政の方でも路面表示やサイン整備は今から頑張っていこうという気持ちになっていると思うんですけど、一方で今まで、ガイドや貸す時にちょっとサポートできたら、と思います。例えば、びわ湖の漁師さんは、湖から山を見て自分の位置を知りたいです。そういうちょっとした楽しみ方を、社会システムや行政の整備以外の部分でも地元の知恵を当て嵌めてサポートできたら、と思っています。

●サイクルツーリズムに必要なものは

稲永：今、4名の方に取り組みされていることから、いろいろな課題が出てきたと思うんですけど、サイクルツーリズムに必要なものについて、ご自分の所でどうか、お話を伺いたいと思いますが、行政・民間・NPO、それぞれ立場が違う方々の視点でご意見が伺えましたらありがたいです。

岩崎さん、サイクルツーリズムを進めるにあたって現状と課題、こんな事もやったら良いんじゃないか、というのも含めてお話をいただきたいです。

岩崎：行政の視点からということですが、行政だからという特別なものは考えつきません。他のパネリストの方がお話されたような取組が大切だと思います。

私は、現在の財団に出向する前に、県で観光振興と地域の総合計画を担当していました。観光振興という点では、着地型旅行商品を育てていきたいと思っており、自転車は有効に使えるツールだと思っていました。また、地域づくりという点では、自転車を中心にしたまちづくりが大変有効だと思っておりました。

サイクルツーリズムというのは、その接点にある事業で非常に興味があります。

「なぜ自転車なのか」ということについて納得してもらうのは、なかなか骨がおれます。例えば、行政の新規施策として自転車に関する事業を提案しても「お前が好きだからだろ」と言われて、それ以上議論できない事も多いです。

地道に「自転車によるまちづくりは素晴らしいですよ」「着地型旅行商品を作る事が地域の振興につながるんですよ」といった啓発を粘り強く継続して土台を作っていくしかないように感じます。

ロングライドが始まって、多少は、話がしやすくなりましたが、まだまだイベントを実施するという以上の議論にはなりません。行政は定期的な異動がありますので、担当レベルでは短期的な成果を求めてしまう傾向もあります。民間の方の息の長い取組を見て、ようやく地域や行政が自転車の有効性に気づく部分もあるのではないかと思います。そういう意味で、民間の取組を行政につなぐなど、地道に人や情報をつないでいくことが大事だと思っています。

もう一つ、淡路島は、自転車に関する事業を推進していく主体がありません。例えば、サイクリングマップの場合、最初、淡路市が、次に、淡路島観光圏協議会が、次に県が作りました。

事業の主体がたらい回しになっている状況で、自転車に関する事業の議論が深まりません。こうした事業に関する地域の合意も作りにくい状況にあります。全島あげた枠組みができれば、色々なことが進めやすくなると思います。

稲永：岩崎さんは「くにうみ協会」ですが、観光とは別で、地域振興ですか？

岩崎：くにうみ協会は、地域振興を目的とした財団ですが、観光は、淡路島観光協会が担当しています。ロングライドも、事務局の一端は担っていますが、観光的視点で取り組んでいるわけではありません。

稲永：私が淡路島に抱くイメージは、食べるものが非常に美味しいイメージですが、そういったところはどうでしょうか？ 例えばマップにそういう情報があるとか、知らない場所へ行って一番困るのが、どこで食べるのか、休憩場所は？ それがあると行く側にとってはポイントになるのですが。

岩崎：サイクリングマップにどの程度の情報を盛り込むかは、結構難しいと思います。観光的な視点から色々な情報を入れたいのですが、1枚に食べる所まで入れるとわけが判らなくなるので、マップではなく冊子になってしまうと思います。

携帯性に優れたコンパクトなマップの需要は多いので、行政としては、無料で大量に配布することになります。20万部作るとなるとせいぜい1枚数円ですので、あまり立派なものには作れないです。

また、一旦情報を掲載すると、その情報を最新のものに保つ必要が生じますので、そういうメンテナンスができない状況では、なかなかそこまで踏み込めません。

●サイクルツーリズムとまちづくり

稲永：岩崎さんも皆さんもご指摘されていますが、サイクルツーリズムは観光として自転車を考えていく、その中にはまちづくり・地域づくりが不可欠な要素であると思っております。そういう面で、近藤さんに伺いたいのは、コミュニティビジネスが地域づくりの中で今後の展開はどうお考えですか？

近藤：われわれは事業者でもあるので、どうしても引っかかっているのは、自転車というものを一律で見られると辛い部分が出てきているのではないかと、という事です。悩みどころは、乗り捨てが必要なのは判っている。けれども、やはり一緒の土俵で議論されるとシンドいのが正直なところなんです。国内でも、パリのヴェリヴみたいな形で、都市型交通インフラの範囲でやっている。その感覚でびわ湖に来られると、どうしてもツライ。なぜなら滋賀県は 140 万人で、県庁所在地の大津市は 30 万人、彦根 10 万人の規模で、それに見合った税収しかない。「たかが知れてる」というと悪いのですが、事業として大都市と同じ土俵で見られるとなかなか厳しい。県庁もそこまで観光情報発信が上手くない現状もある。一桁二桁、掛けているものも違うので、「ここは違う」とわかってほしいところもある。

一方で、その良い所をビジネスにしていこうという流れは正しいと思うのですが、この中で地域の光は何なのか、私たちが判った上で発信していかなければならない。それをつなげていくガイド、語り手が必要だと思います。

杉野さんも仰っていましたが、コミュニティビジネスをボランティアでやっても、どうしてもある程度の限界が来ている。レンタサイクルもあれだけやって、その次の段階に行かなければならない所に来ている。では、われわれはどうしていくか？ 二つの方法しかないと思います。規模を拡大し、台数を増やして、ぐるっとびわ湖一周で展開するか。あるいは杉野さんのように、自分の価値をきちんと伝える。しまなみでもやっておられるように、小さなビジネスの価値をスタイルとして確立していく必要がある。いずれにせよ、私たち地域づくりをやっていく人間としては、「プラスサイクル、自転車どうでしょう」という事で、いろいろな発想でやっていく必要があるのだと思います。一つは都市型レンタサイクルでもいいけれど、走る距離を増やす事をやっていかないといけない。せっかくびわ湖に来てもらっているのだから、船を使ったレンタサイクルもできる、というようにチャンネルを増やしていく必要があるのではないかと薄々感じていま

す。乗り捨てが必要ではないわけでもないし、返さないわけでもないけど、どうしたら良いのか、私がうっすら考えているのは、複数の事業主体で車体を共有して、乗り継ぎや乗り回しできるような仕組みができないか、と考えています。例えば大津の業者とどこかの事業者とウチと、ある程度の距離を持って、何台か共有する、そういう構想は持っています。

もう一つは、いろいろな事、新しい事にチャレンジする試行錯誤が必要ではないか。近藤先生が書かれたサイクルパターンランゲージという資料がありますが、全然今まで考えた事のなかったものを組み合わせてやっていく。例えばホテルが自転車を販売しても良いわけですね。自転車整備士がいる、というような条件はありますが、新しい組み合わせをしていく。雪の中でサイクリングツアーをすとか、そういう新しい事をどんどん生み出していけば、そこに新しい価値が生まれるのではないか。小さくてもそれを実践していくことでビジネスにつながっていくのではないかと考えています。

もう一つ、滋賀らしさ。それぞれが考える必要があると思っています。滋賀県はこれが判りにくい土地で、「滋賀らしさって何ですか？」と聞いても、誰も答えられない事が多い。私の「滋賀論」で良い、それぞれが考えていけば良い。私は京都から電車で山科を過ぎて大津に来た時の、時間のゆっくりとした感覚こそが滋賀らしさだと思っています。これを味わうために時間的な余裕をしっかり設計してあげる、これがツアーに必要なんじゃないか。そこで当然お金の計算があると思う。そこを上手にやってらっしゃるのが、今治のジャイアントの値段設定で、風景と車体を組み合わせてそういう事をやっている。私たちもこういうものを目指していかなきゃならないと思う反面、少なくとも2～3日はかけて廻るものだという認識を滋賀びわ湖の周りの人たちが持てたら、と思います。

私はどちらかと言えば、コミュニティビジネスよりもツーリズムの方に行った方が良いと思います。個人が面白い事を語って行って、小さなビジネスをつなげていく事が重要なのではないか、と思っています。滋賀でも面白い話、天狗とか妖怪とかをツアーにつなげる取り組みを始めています。こういう人がもっと増えて行って、私たちのチャンネルとして「プラスサイクル 自転車どうですか」と一緒にやってつながっていくのが重要ではないかと思っています。滋賀でヘンな語りをする人たちがいっぱいいるのを許容する、独占しない形でモヤモヤっとし

た感じになっていくのではないかと思います。言葉としてこの二つだと思っています。

全然知らない人だけど、あなたの所にツアーで来た人が幸せになって帰っていけば良いのではないかと。びわ湖のために何か考えていけたらいいのではないかと考えています。

最後に一つ、暴論なのですが、ひょっとすると、私が考えるサイクルツーリズムや自転車の環境整備というのは、一つの方向は台湾にあるのではないかと考えています。自転車というのは欧米の近代の都市システムで、日本にそのまま当て嵌めるとどうしてもシンドい。なかなか難しい。金沢では上手に翻訳して、馴致して、コミュニケーションを上手にとっていますけれど、時間も掛かる。私たちはヨーロッパを真似するより台湾だと思っています。世界観が似ているし、今、私たちがやろうとしているツーリズムはエコツーリズムだし、地域観光に近いし、たぶんそうだと思います。特に東側の台東など、中国と違う側が参考になるのではないかと、と思っています。実際に行ってみたら台湾は自転車道を整備しています。ジャイアントのレンタサイクルは1時間 600円くらいで貸しています。借りるのは外国人が多いという話でした。台湾の人たちも借り始めている。良い自転車を入れてレンタサイクルをやっている。彦根でも見かけるような街の自転車店とジャイアントの系列店の二つに分かれているような気がしました。台北のユーバイクは人気でした。大津あたりではいけのではないかと、も思いますが。

稲永：持続可能な活動としてどうしていくのかは最大のところかと思っていますので、そこはいろんな知恵を出し合っていかなければいけないと思います。日本人の良い所は、いろんなものをどんどん取り入れて自分たちのものにしていく、得意技ですので、そういう所は勉強して行けば良いかと思っています。

今、いわゆる受け入れ側からのご意見を伺ったんですけど、杉野さんは送る側ですね。地域と一緒にいろんな事に取り組まれているとの事ですが、お客さんをお連れする立場として、どういったものが求められていくか、お話いただけますか。

●ツアー開催の立場から

杉野：そうですね、今、送り出す方の仕組みとしては、バスで自転車と一緒に送り出す。コンテンツとしてはやはり、地元でどういようなおもてなしをしていただけるか。それをしていただける所へ人は連れて行ける。近藤さんからお話があったように、連れて行く側にお客さんがついてくる。別にカリスマ添乗員になる必要はないんですけれど、この人が連れていってくれるなら面白いに違いない。そうでないとガイドはできない。「シンドいことをしてはいけませんよ、無理しないでください、楽しいことだけしてください」というコンセプトだけでお連れして、地元でおもてなしをしていただく。それは各地域で違う。しまなみ海道で求めるのは橋を渡る、あの爽快感。びわ湖の場合は、最初に行くロングライドはやはりびわ湖だろう。全周鉄道が通っていますから、シンドくなったら輪行して帰れば良いんです。淡路島ではバスに乗るわけにはいきませんから、私らの出番、サポートカーがずっと付きます。順番としてはびわ湖へ行き、しまなみへ行き、淡路島を走る、だと思っうんです。それぞれの切り口の違いがありますので、いたれりつくせりをどこで出すのか。しまなみでは放ったらかしで良い。非常に失礼な言い方ですが、あまり大きな観光資源が無い、ただの田舎で走りやすい道があり、季節には美しい自然がある、美味しい食べ物が無い、有名なお寺が無い、でもガイドとしてここを走らせたい、という所があるんです。そこで一人一人とのふれあいをどういうふうに作っていくか、というのが地元の力だと思っうんです。

まず最初に行政でやってほしいのは、「自転車が邪魔」だと感じない環境づくり。私たちがお客さんを連れて行って、「自転車ツアーはもう来てほしくない」と言われたら最悪なんです。端的に言うと駐輪場もそうですし、狭い路地に入った時に、どういう連れて行き方もある、物理的にここへ停めて、歩く、という所の環境整備をしていただきたい、自転車独特のものを理解していただきたいと思っいます。

美味しいものもツアーに入れるんですが、自転車乗り独特の「ほしいもの」があるんです。しまなみなら途中で「はっさく大福」を食いたいんですよ。暑い時ならジェラートがほしいんですよ。アミノ酸も十分考えて作っておられるし、極端な話、造り酒屋さんで甘酒をスポーツドリンクの代わりに出してほしい。これもアミノ酸飲料ですよ。普通なら 150 円のスポーツドリンクが 400 円もしても、それでもやはり買います。そういった事を認識していただきたいと思っいま

す。宇都宮さんや私がそういう事をしっかり伝えていかないといけないとつくづく思っています。少なくとも理解していただける素地を行政をお持ちいただきたいと思います。

●サイクリストはお金を使わないか？

稲永：締めくくりになります。皆さんのお話を伺って、宇都宮さんから、こういう事をしていけば良い、していきたいな、というお話をいただけますか。

宇都宮：そうですね、冒頭でお話しでした、「自転車の人はお金を落とさない」。実はしまなみでもよく言われていまして、地元で商売をしている人たちで「こんなに自転車の人 coming ののに、あの人らお金を落とさんけんねえ」と言う人は多いんです。でも、逆だと思っんです。落とさないんじゃないで、落としたいものがないんですよ。杉野さんも仰ったように、自転車の人 of 心に寄り添ったものを作れば、必ず落とすしていきます。実は自転車の人に向けたお土産品は無かったんです。今まで通りバスで来た人、クルマで来た人に向けたものを自転車の人に売ろうとしている。そりゃあ誰だってそんなものを買うわけが無いですよ。だからもっと自転車の人 of 心に寄り添ったものを作って行く必要がある。その視点は、自転車の人たちからアドバイスを受けないと判らないですよ。私たちは自転車の人たちに使ってほしいもの、「ああ、いいな」と思うものを商品展開をやっています。身に付けるもの、アパレル系が多いですけども。情報発信しているマップやブックもそうなんですけれど、自転車の人 is 必ずお金を落とすしていきます。

それから、奈良の「自転車にやさしい宿」は、私たちもしまなみで「旅の宿」という名で整備していきます。奈良県をお手本にして、自転車の人たち向けに。「どの宿がおすすめですか？」とよく聞かれるんですが、安心して泊まれる場所があるというのは大事ですね。1日 with 通り過ぎるのはもったいない、泊まってお金を落とすしてほしいじゃないですか。しまなみでよく言われるのは「便利になったから素通りしてしまふ。泊まらなくなった。お金が落ちていかない」。だから自転車の人に向かって4月からホームページを立ち上げて、宿の情報提供をしていこうという予定です。すごいのは、特に今治の国際ホテル、玄関から入るとシャンデリアがあつて、ソファがあるような高級感あるホテルでも今や、自転車

でそのまま押して入ってチェックインができるんです。そのままエレベーターに載せて廊下を押して、客室で一緒に泊まれる。自転車を客室へ持ち込めるホテルが今治・尾道両市内で増えています。自転車が地域を変えたな、と思うんですよ。何年もかかって意識が変わっていった。自転車で泊まりやすい宿の仕組みの構築をする事で、お金を落としていく事につながるんじゃないか、と思います。

ガイドですが、環境系で「インタープリター」という言葉があります。人と自然をつなぐように、ガイドが他所から来た人と地域の人をつなげる、といった役割をしていく事が、私たちがやっている着地型の強みだと思うんです。地元にいる私たちにしかできないご案内が初めて他所から来た人た人に提案できる。自転車って誰でも乗れる、ガイドが無くても。でもその人と一緒に行ったからあった出会い・コミュニケーション・交流を促してあげたい、それが地域の人たちの元気につながっていくと思うんです。そのためには自分たちが時間をかけて地元に入って行って、地元を耕して、そして人という資源とつながっていかないといけないんだろうな、と思いながら日々常に、島に足を運んで、地元の人と馴染んでいく努力をしているんですけれど、それがあって始めて自分たちにしか出来ないツアー展開ができるなと思います。それが大切な役割だと思いながら日々活動しています。

稲永：本当にいろいろなお話を聴けて良かったと思っています。実は私たちもびわ湖一周で活動しています。近藤さんが「男が多い」と仰っていましたが、私たち「輪の国」の女性で「女子的ビワイチ」と銘打ってビワイチするんですけれど、「突っ走って走るんじゃない、いろんなところで美味しいものを食べて、いろんな所を見るんだ、なぜ皆なそうしないんだ？」って思っていたんですが、それは伝えなきゃ判らない事だし、それをどういうふうに判ってもらうのが大事なんだな、と感じました。

今日は90分という短い時間で盛りだくさんの話を伺わせていただきました。本来でしたら会場から質問を受けさせていただければと思ったのですが、会場の都合上、延長する事ができないので、終わらせていただければいけないのです。今回たくさんの方々にご参加いただきいただきありがとうございました。これは自転車に対する関心が高くなっているのだと思っています。自転車を取り巻く環境は必ずしも良いものばかりではなく、道路環境やいろんな面で厳しい事が

たくさんあります。でもそれは特に自転車だけに限らず、いろんなことをしていく上において問題があるのは当たり前なので、それを一つ一つどう解決していくのが良いのかを考えていけば良いのかと思います。今日伺いまして、自転車であれば味わえない愉しさをどう提供していくのかがキーポイントになるのかと思います。そういう意味でサイクルツーリズムはすごく大きな可能性を秘めたものだと感じました。今回のフォーラムがこういったものを考えるきっかけになるのが良いのかと思います。最後に、本日話いただいた4人の皆さんに拍手をお願いいたします。

●挨拶

森脇賢（滋賀県観光交流局）

本日は宇都宮さん初めとして、パネリストの方から非常に有用なご意見をいただき、どうもありがとうございました。

皆さん、やはり民間の方からいろいろな行政への批判とか、非常に耳の痛い話もありながら、やはりNPO、民間の方々に引っ張ってもらっているのかと思っています。滋賀県も元々は、サイクリングが観光やお金につながるとは思ってなかったのですが、サイクリングする方がお金を落とすようにしないといけない、という話が最後にあり、なかなか勉強になりました。

滋賀県の観光では「滋賀県観光指針」というのがありますが、今年に改訂され、その中で「滋賀ならではの観光の推進」という項目があり、そこでエコツーリズム、スポーツツーリズム、サイクリングやウォーキングを絡めながら滋賀県の自然を楽しんでいただく、という方に観光をシフトしていく、という項目を立てています。滋賀県の戦略とサイクリングがうまくマッチすれば良いと思っていますので、よろしく願いいたします。まだ実践というか、知識というか、頭だけで実践とつながっていない所もございますので、勉強・研究させていただきながら一緒に取り組みたいと思いますので、どうぞよろしく願いいたします。ありがとうございました。

●閉会の挨拶

藤本芳一（輪の国びわ湖推進協議会副会長／自転車ライフプロジェクト代表）

今回このシンポジウムの事務局をさせていただいて感じたのは、皆さんすごく関心高いんですね。予約申込みの100人枠がもう定員一杯で、この後の懇親会の定員も一杯になってしまった。今日舞台上に上がっていただいた方だけでなく、すでに各地で実践させていただいている方、舞台上に上がってお話していただきたいような方がたくさん来られています。僕らもこれから滋賀で自転車観光促進のために頑張っているいろいろな活動していきたいと思っていますし、会場に来られておられる方も各地で一緒に頑張って自転車観光、地域おこしを盛り上げていただきたいと思います。本日はありがとうございました。